

## 亡霊（コンデナード）から見た溺死者（アオガード）

加藤隆浩（関西外国語大学）

キー・ワード：アオガード、溺死者、亡霊、コンデナード、アンデス、海民

### Ahogado: estudios comparativos con condenado

TAKAHIRO KATO (Kansai Gaidai University)

Keywords: ahogado, condenado, Andes, pescadores, costeños

#### 1. なぜ亡霊を問題とするか／亡霊を論ずることので何が分かるか

アンデス世界では様々な超自然的存在が蠢いている。ここで取りあげる亡霊もその範疇の一つである。しかし、亡霊と一口に言ってもそのように呼ばれるものは世界中のどこにでも分布し、その先々で形状も性質、社会的意味や機能も千差万別である。するとすぐに統一的な解釈を求めようとする向きも出てこようが、ここではそうした誘惑には乗らない。ひとまずは古典的な—必ずしも「古い」ということではない—手法に則り細部にこだわってそれを地域単位で検討してみようと思う。

アンデスでは人々の間でしばしば亡霊が話題に上る。実際にそれと遭遇したと言い、時には日常世界では信じがたいような話になることも少なくない。実体験の亡霊であれ亡霊譚であれ亡霊の存在が前提であり、それは部外者にとっては「譚」が付いて単なる「お話」のように受け止められるかもしれないが、当人たちにとっては、信憑性のあやふやな世間話というよりも、社会で共有される実話、真実の出来事ということになる。したがって話の中の出来事、所作も、現実の出来事、事実と受け取られ、亡霊譚は「譚」であるにもかかわらず、その中味は社会的存在が引き起こした社会的事実ということになる。

では、それはいったいどのような内容なのか。亡霊はこの世とあの世を行き来する。その往来が亡霊の必要条件と言ってもよい。そうであれば、この超自然的存在を切り口に、現世も来世も射程に入っている。もちろん、その行き来に注目すれば、両者をつなぐ世界をも見ることができる。そ

ればかりか亡霊は、死後普通の人々の行く道を阻まれ、この世に舞戻ることを余儀なくされている点に着目すれば、どのような掟の侵犯行為が、亡霊化というサンクションを招くのか、またそれはなぜか、など亡霊化の理由を検討することで、アンデスの人々が究極的に考えるべき社会像の輪郭を垣間見ることができ、彼らの想像力の基をなす心性の一部に触れることにもなるはずである。

#### 2. 2種類の亡霊

アンデスの亡霊譚を研究者の目に触れやすい形でまとめたのは、ホセ・マリア・アルゲダスで、その「マンタロ谷の民俗」[1953,1978]には20話余りの亡霊譚が記録され、これまで圧倒的影響力を放ってきた。例えば：「くつをほしがる亡霊」は次のように語られる。

ある夜、旅の商人が人けのない山道を歩いていた。すると亡霊が向こうから叫び声をあげてやってきた。旅人は、びくびくしながら、「お前は誰だ？」と亡霊に尋ねた。すると、亡霊は自分の正体を明かし、自分が亡霊になったのは、銀貨をヒョウタンに入れて埋めたままにしておいたのが原因だと告白した。そして旅人に、もし亡霊の出身地の近くを通ることがあれば、家族に、次のような伝言を頼みたいといった。「自分は、銀貨を地面に埋めて隠した廉で、亡霊になった。もし、その銀貨の入ったヒョウタンを掘り出してくれるなら、私は神に許され天に召されるだろう、と [アルゲダス 1978:56-58]。

以上は、マンタロ谷の典型的な亡霊譚の例で、ストーリーの展開に「亡霊の告白と懇願」というモチーフが入っているのが特徴的である。そし

て、多少の例外はあるにせよ、それがアンデスの亡霊（譚）の典型と見なされてきた。だから、アンデスのどこでも亡霊と言えば告白懇願型であるという安易な決めつけが一般化してきた [加藤 1981 ; Fourtané 1989 etc.]。

しかし、マンタロ谷以外で採集された亡霊譚を注意深く読み、その出所を個別にあたってみると、アンデスの海岸地方には、告白懇願型とは別の亡霊譚が分布していることが判明する。それがアオガード（溺死者）で、海岸地方を流離う海民が、「海の亡霊」と呼んでいるものである。たとえば、次に提示する話はその典型である。

#### エル・アオガード

アオガードは亡霊である。ワンチャコとサンティアゴ・デ・カオとの間で商売が行われていた頃の話である。二人の商人がアオガディートと出会ったのである。ある夜明け方、荷を用意して、二人はロバに乗って楽しく話しながら道を急いでいた。すると、突然、ロバが耳をピンと立てた。それは、危険が迫っているという印だった。強く鋭い口笛の音が聞こえたので、二人のうなじの毛も逆立った。それは、アオガディートと出会ったという証拠だった。アオガディートは、海で溺れて死んだ者の亡霊であり、救われるためには、もう一人のキリスト教徒を自分と一緒に連れていかねばならない。口笛の音が近くで聞こえる時には、それは遠くにおり、遠くに聞こえる時には、それは近くにいるということである [2018 年、ワンチャコにて再話]。

### 3. コンデナードとアオガードの比較

両者には死後の世界への入場を拒絶された者として共通点もあるが、より重要で看過できない相違が2点ある。

本質的な相違 その1)：超自然的存在の正体を暴くか暴かないか

コンデナードでは、生者が「お前は誰だ」と尋ね、コンデナードもそれに答えて身元を明かす。それに対しアオガードは言葉を持たず、コミュ

ニケーションがとれない。分かっているのは、匿名の溺死者ということだけである。

本質的な相違 その2)：死者が通常進む死出の道から外れ、亡霊化する理由

山間地では主に財に関わる犯罪、反社会的経済行為・欲望が亡霊化の原因となり、その反社会的行為が正常化してはじめて救済の道が開かれる。他方、海岸部では溺死が亡霊化の原因となる。それは他者を困らせるような行為ではないが、溺死者は亡霊化する。救済されるには、次の犠牲者（アオガード）を用意しなければならない。つまりアオガードはアオガードを再生産しなければならないのである。

### 4. このような差異が出てくる背景は何か

それにはまず、亡霊とアオガードとの社会・宗教的意味の相違があるように思える。コンデナードの社会的意味は、亡霊になっている個人の特定し、財の独占の開放を徹底しようというものである。それに対しアオガードは人々を恐怖せしめる亡霊ではあるが、そこにはバルボアのクロニカの記述、海岸地域から出土する土器の図像、また現代のいくつかのモノグラフに記されているような海への人身供儀と関係があるように見える。

#### 【主要参考文献】

Arguedas, José María, 1953, Folklore del Valle del Mantaro, *Folklore Americano*, Año1, No.1, pp.101-293. (アルゲダス・ホセ・マリア [三原幸久・在田佳子訳]、1978、『インカの民話』、新世界社)

Fourtané Nicole, 1989, “El Condenado”: Una expresión del sincretismo hispano-quechua, Universidad Nacional Mayor de San Marcos Facultad de Ciencias Sociales.

加藤隆浩、1981、「ペルーにおける亡霊説話」、『イペロアメリカ研究』、III-2、pp.29-42。